

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	放課後デイサービスヤシノキ		
○保護者評価実施期間	2025年 12月1日		～ 2026年2月10日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	33	(回答者数) 20
○従業者評価実施期間	2025年 12月1日		～ 2026年2月10日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	8	(回答者数) 8
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 2月20日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	充実したプログラムの計画・実施している。SSTは目的を明確に設定し、ゲーム形式やロールプレイを取り入れながら、子どもが楽しみながら社会性を学べる内容としている。また、子どもの興味・関心を積極的に取り入れ、個々の発達段階に応じた個別対応を行うことで、無理なく参加できる環境を整えている。	年間計画・月間計画を作成し、五領域を意識した支援を実施している。SSTはゲーム感覚を取り入れ、子どもが「楽しい」と感じながら学べる内容に工夫している。見本提示や視覚支援を活用し、参加しやすい環境を整えている。	プログラムの効果を振り返る機会を設け、内容の精査を行う。外部研修で得た知識を取り入れ、支援の質をさらに高める。活動成果の見える化を進め、保護者への説明を充実させる。
2	指導員の質の高さと安定した支援体制で、子どもの特性や成長過程を継続的に把握したうえで支援を行っている点が強みである。経験に基づいた安定した関わりにより、子どもが安心して過ごせる環境を維持している。	長年勤務している職員が多く、安定した関わりを継続している。外部研修へ積極的に参加し、専門性向上に努めている。ケース共有を定期的に行い、支援方法の統一を図っている。	年間研修計画を体系化し、専門分野ごとの学びを強化する。内部研修を充実させ、知識の共有を徹底する。支援マニュアルの整備を進める。
3	地域イベントへ積極的に参加するだけでなく、事業所自らが企画や運営にも関わり、子どもが地域の一員として役割を持つ機会を創出している。買い物体験や公共施設の利用、地域行事への参加などを通して、実践的な社会経験を継続的に積み重ね、社会性や自信の向上につなげている。	地域イベントを自ら企画・参加し、社会経験の機会を提供している。子どもの好きなことを療育に取り入れ、主体的な参加を促している。	地域連携先を拡充し、定期的な社会参加活動を実施する。役割体験の機会を増やし、社会性の向上を図る。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	言語聴覚士等の専門職が常勤配置されておらず、構音や会話面に課題のある児童への専門的支援体制のさらなる充実が求められる。	言語聴覚士等の専門職を常勤配置する体制が整っておらず、構音や語彙発達、会話のやり取りに課題のある児童に対し、専門的視点からの評価や個別プログラム作成が十分とは言えない状況がある。職員は日常的な関わりの中で支援を行っているが、専門的アセスメントや継続的訓練体制には限界がある。	言語支援に関する外部研修への参加を強化し、職員の知識向上を図る。また、言語支援教材や構音訓練ツールを導入し、日常支援の中で活用していく。必要に応じて外部専門家との連携や助言体制を検討し、専門的視点を取り入れた支援体制の充実を図る。
2	一軒家構造により階段や段差があるため、日常的な安全管理体制の継続的強化が必要である。	一軒家構造であるため、玄関や室内に段差があり、階段の昇降が必要となる環境である。完全なバリアフリー化が難しく、身体機能や注意力に課題のある児童にとっては転倒リスクを伴う場面が存在する。	階段や段差使用時には職員の付き添いを徹底し、見守り体制を強化する。滑り止め設置や視認性を高める表示を行い、物理的な事故予防策を講じる。さらに、定期的な安全点検とヒヤリハット共有を行い、リスクの早期発見と改善を継続する。
3	室内スペースに制約があるため、運動活動の実施方法や環境整備についてさらなる工夫が求められる。	室内の広さに限りがあるため、大人数での運動活動やダイナミックな身体活動を十分に行うことが難しい。天候不良時には活動内容が制限されやすいという課題もある。	近隣の公園や公共施設を積極的に活用し、屋外での運動機会を確保する。また、室内でもサーキット形式や少人数グループ分散型の活動を取り入れ、安全を確保しながら身体活動量を確保する工夫を行う。